

全日中事務局だより

「第六五回北海道中学校長会研究大会
十勝・帯広大会」開催される

▼九月二十七日(金)～二十八日(土)に「第六五回北海道中学校長会研究大会十勝・帯広大会」が帯広市民文化ホールをメイン会場に開催された。

▼この大会には全道から三二〇人を超える参加があり、二日間にあつた熱心な研究大会が繰り広げられた。

▼開催時期が九月下旬ではあつたが、会場の帯広市は、日中の最高気温が二度近くまで上がり、本来の季節ではない気候に、参加者も一様に驚いていた。

▼第一日目、午前は開会式、青海会長による情勢報告、全日中岩手大会での提案概要説明が行われた。

午後は、五つの分科会に分かれ、事例発表の後、少人数に分かれ熱心な議論が展開されていた。



五つの分科会は、次のとおりである。

- (一)「社会に開かれた教育課程」の実現
- (二)新たな時代に求められる資質・能力の育成と学習評価の充実
- (三)豊かな心と健やかな体を育む教育の充実
- (四)多様化した学校教育課題に対応できる教員の育成と働き方改革の推進

(五)家庭・地域や校種間における連携・協働の推進

▼九月二十八日には文部科学省説明が行われた。

講師として文部科学省初等中等教育局教育課程課長の武藤久慶氏が、豊富なプレゼンテーション資料を基に講演された。

▼武藤教育課程課長は、平成二十二年四月から二十六年三月まで北海道教育委員会教育政策課長、義務教育課長、学校教育局次長を歴任されており、北海道には縁の深い講師である。

▼武藤課長からは、「なぜ令和の教育改革なのか、なぜGIGAスクール構想なのか?」というテーマで説明があった。教育改革の背景として六つの外的トレンド(①人口減少・少子高齢化 ②グローバル化 ③多様性&包摂の重視 ④デジタル化 ⑤変化の激しい不確実性の時代 ⑥人生百年時代)に基づき講演があった。

▼記念講演は、講師に田中賢介氏。演題は「田中賢介は、なぜ学校をつくったのか？」であった。

田中氏は、二〇〇〇年に日本ハム・ファイターズに入団し、選手として五度のリーグ優勝、二度の日本一に輝いた。

その後、MLB・サンフランシスコ・ジャイアンツで活躍し、二〇一五年から北海道日本ハムファイターズに復帰した。二〇二〇年に同球団スベシャルアドバイザーに就任。同年八月に田中学園理事長、二〇二二年四月に立命館慶祥小学校を開校。

▼「北海道に来て自分の人生が変わった。今度は自分が北海道の子供たちに貢献したいと思ってきた」と小学校開校の動機を語っていたことが強く印象に残った。

▼北海道地区の研究大会は、道内での移動が広範囲に及ぶため、例年、金曜日と土曜日に開催されている。

▼この大会の準備並びに運営に当たられた道中事務局はもちろん、十勝及び帯広の校長先生方に感謝申し上げる。

「令和の日本型学校教育」を担う質の高い教師の確保のための環境整備に関する総合的な方策について（答申）」を踏まえた取組の徹底等について（通知）が发出された

▼九月三十日、文部科学省は「令和の日本型学校教育」を担う質の高い教師の確保のための環境整備に関する総合的な方策について（答申）」を踏まえた取組の徹底等について（通知）を、各都道府県知事、各都道府県教育委員会教育長、各指定都市市長、各指定都市教育委員会教育長宛、发出了した。

▼この通知では、教師を取り巻く環境整備の最終的な目的を、学校教育の質の向上を通じた、「全ての子供たちへのよりよい教育の実現」と位置付けている。

▼この通知のなかで、特に学校における働き方改革の更なる加速化の重点として例えば、「学校プールの管理」について、原則「学校の業務だが、必ずしも教師が担う必要のない業務」であり、学校プールの管理業務に関する教師等の負担を軽減するため、教育委員会は、指定管理者制度の活用や民間事業者への業務委託等の取組について検討することが示されている。

▼また、教育課程の見直し、学校行事の精選・重点化について、標準授業時間（年間一〇一五 単位時間）を確保するために、必ずしも週当たり二九単位時間の授業を実施する必要はないことが示されている。

▼各学校においては、今一度、これまで当然のこととしてやってきたことを見直すこと、即ち、前例の再点検・再考が必要がありそうだ。

（事務局長 富士道正尋）